

●柴田 歩 (2005~)

『真贋の境界Ⅱ』(2025)
ソロ・フルートのための

■プロフィール

8歳より作曲を始める。2022年度加藤山崎奨学生。現在、東京藝術大学音楽学部作曲科2年在学中。2025年3月、東京藝術大学より海外派遣奨学金を得て、パリ国立高等音楽院にて即興演奏を学ぶ。作曲を金子仁美、エクリチュールを林達也に師事。

プログラム・ノート

ゴッホの精巧なレプリカを「贋作」(にせもの)とは知らず、感動した経験がある。「真」は本物でその対極は「贋」なのか。そこに境界線は本当に存在するのか。この作品はフルートの「音色」を中心に「真贋の境界」を表現したものである。

「真」=フルートが出す「本来の」音色。

「贋」=フルートが特殊奏法等を用いて他の楽器を「模倣した」音色。

この楽曲は3つの部分からなる。始めは「真」、次に「贋」、最後は「真」と「贋」のMIX。最終的に境界は曖昧となり、「真贋」の区別すら無意味なものとなる。

●趙 亮瑜 (1998~)

『無根の樹』(2025)
プリペアド・ヴァイオリンとチェロのための

■プロフィール

中国の山西省出身。西安美術学院音楽学専攻を卒業。現在、国立音楽大学大学院修士課程作曲専攻に在学中。作曲を斎木由美に師事。

プログラム・ノート

人間は根を持たない木のように、この世に放り出された存在であり、虚無の中でどうにか生きようとしている。桃源郷や浄土といった理想郷はおそらく意味のある避難所だ。この作品は、何を作るにも欠陥があり、材として無用だから伐採されず、それ故に立派な大木になったという「無用の木」という莊子の話に着想を得、「櫛」という散木が、虚無の地において成長する情景をイメージして作曲した。

作品では、弦と指板の間に指を挟み、弦の張力を調整して音高を変化させるなど通常の演奏法とは異なる音響を作り出すことを試みている。全体はL-system(自然物の構造を表現できるアルゴリズム)を用いて構築されている。

●渡部瑞基 (2000~)

『Baum Test I』(2025)
弦楽三重奏のための

■プロフィール

作曲を鳴津武仁、横島浩、成本理香に師事。ピアノを降矢美穂子に師事。第6回両国アートフェスティバル作品公募入選。アンサンブル・トーンシーカー第4回演奏会作品公募選出。現在、愛知県立芸術大学博士前期課程作曲領域1年在学中。

プログラム・ノート

バウムテストとは、木の絵を描いてもらい、その絵を分析することで性格傾向や心理状態を読み解こうとする心理検査の一つです。

紙の上に描かれた想像上の木は、シンプルながらもその個人の内面が投影されているという考えに強く惹かれた私は、^{もつ}纏めた木の枝を解くように人の心の複雑な綾をかき分けて、その奥底へと入り込んでいく——そんな音楽を書きたいと思いました。